

---

# 道（タオ）

ふんわり名人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道タオ

### 【Nコード】

N5940G

### 【作者名】

ふんわり名人

### 【あらすじ】

三国時代最強と伝わる呂奉先。裏切りの人生を送った武将として知られる彼の評価は低い。張遼、高順という破格の武将達を配下に従えた彼が本当に目指した未来とは。呂奉先の真実の姿を壮大なスケールで描こうと思います。

## 第1話 序章

### 序

短い夏に急かされるように植物達は緑の世界を作り初めている。今年の夏はいつもより暖かい。村から少し登った丘の上で少年はそんなことを考えていた。

切れ長の目に涼しさを持った美しい少年である。向かいの風を受け、後ろで束ねた髪が揺れる様は天の使いのようだ。しかし簡素な衣服の隙間から見える筋肉は鋼を束ねたように隆起していた。しなやかな体つきは野生の獣を連想させる。美なのか野なのか、正なのか邪なのか、少年自身ですらまだ決めかねているようだった。

視線の先に少年は自分の村を見ている。若々しい緑の中、村だけがくつきりと浮き上がっている。暖かさのせいか時間がゆっくり流れているようだった。

少年はこの場所からの眺めがどの景色より一番好きだった。村の中で小さく動く人々、立ち上る炊飯の煙、遠くに聞こえる村人の声。その全てが少年の心を満たした。

長い間少年は飽きるふうでもなくその景色を眺めていた。

「伯にいちゃん」

ふいに後ろから声がした。伯と呼ばれた少年は優しく振り返った。美しい少女が夏の陽光に髪を溶かしながら笑っている。

「季蟬か…また後をつけてきたな」眩しい少女の姿に目を細めながら伯は笑った。

「そろそろ帰ろうよ」

甘えるように季蟬は伯の目を見て言った。

伯は無言でうなずき、季蟬を抱き上げると丘を降りはじめた。陽はとうに南天を過ぎていた。

家の前までくると伯は大事な宝物を扱うようにそつと季蟬を降ろした。

「ありがとう！また後で遊ぼうね。」そつ言つと季蟬は元気よく走りだした。

季蟬の姿が見えなくなるのを確かめて伯は家に入らず中庭へ回った。

雲が出てきたせいか日差しは弱くなってきている。そのせいか伯の顔が少し厳しくなったようだった。

中庭の端には静かに男が立っていた。

気付いた伯が軽く目配せすると男は傍らに置いてあつた木剣を投げた。

「遅刻です。伯様」無愛想でどこか怒つたような声だ。

だが彼がそんなことで怒る人間でないことを伯は長い付き合いで知っている。

「すまないラクレス。季蟬がせがんでな、丘へ行っていた」

「逆でしょう」ラクレスと呼ばれた男は短く言い返した。

「季蝉が稽古に間に合うようお前を連れてきてくれたのだろう。」  
しわがれた太い声。いつの間にか父まで中庭を眺んでいた。

「どうも皆季蝉の味方だな」伯は苦笑いとともに投げられた木剣を構え男をみる。

この国の人間ではない。

浅黒い肌に緑がかかった瞳、皺の刻まれた顔、髪はひどい癖毛。体軀はそれほど大きくはないが引き締まっている。

ラクレスという名前は他の国ではありふれた名前なのだろうか。  
手にはすでに伯と同じ木剣が握られている。

ラクレスの緑色の瞳が深さを増した。

## 第2話 序章

じとり、と場が特別な空気に変わっていく。

二人が履く羊革をなめして作った靴はまるで動いていない。

しかし少しずつ2人の剣気は大きく、鋭くなり相手に向かっていく。この微妙な 空間の歪み。武に暗い者には分かるまい。伯は思う。大きな剣気の波は周りの物の質、量をも変える。

ラクレスの剣気は一定ではない。寄せては返す波のようである。こちらが行こうと思えば退き、逆に退こうと思えば来る。決して相手の剣気と交わろうとはしない。その境目ぎりぎりの所で伯もまた機を伺っている。剣気の進退に合わせ、ラクレスの存在は大きくも小さくもなる。これを感じられない者であれば、ラクレスに一呼吸の間に打ち倒されているだろう。

今うちこめば十中十かわされる。

ぐぐ。

今うちこめば良くて相打ち。

ぐぐ。

今うちこめば…いや…

ぐ。

今！

瞬間。ラクレスの姿は陽炎のようにゆらぎ、消えた。足首の動き

だけで伯の左方へ飛んでいる。50を過ぎたと聞く男の動きではない。

完全に間合いを外された伯は、しかしその動きに付き合うことはしなかった。ラクレスの側面からの打ち込みを前を向いたまま弾き返す。乾いた音が鳴るのと同時にラクレスは二度目の跳躍を行い完全に伯の後方に出た。剣を弾き返された反動を利用した恐るべき体捌きである。無防備な後頭部に向けラクレスは竹を割るように剣を振り下ろす。その剣が頭部を捉えたと見えた瞬間、伯は右足を軸に反転していた。

ラクレスの剣は軸をずらした伯の頭髪をかすめ、交差するように振られた伯の剣先がラクレスの額の上でぴたりと止められた。

「お見事です。伯様」やはり怒ったようにラクレスは言った。

### 第3話 序章

その言葉には答えず伯は無言で剣を引き呼吸を整えた。首筋には汗がつかび、顔は少し照れたように紅潮しラクレスを見ている。

正直ラクレスは驚いていた。2ヶ月程前から伯の動きに無駄が消え、静から動への移行に鋭さが増した。常人ならもはや束になつてもかなうまい。だがそれでも自分が打ち負かされるのは数年は先である。そう思っていた。

しかし少年の才能はどうやらラクレスが計れる器を超えていたようだ。すでに剣身一体となりつつあり、底知れぬ武の才を放ちはじめている。呂大夫との約束の時が来たようである。少年は男になる時が来たのだ。

ラクレスは西日をまとった美しい少年を見ながらそう思った。

ふいに。「伯よ」と、父は静かに声をかけた。

呼ばれて伯は向き直る。父の目は伯の顔をじつと見ていた。沈む夕日の斜光が眉間の皺をさらに深いものにしていく。

「剣では常に勝るか」短く父は問うた。

「…」

伯は答えない。確かに剣において、というよりも剣においてのみ自分はラクレスより技量が上達したのである。しかしそれとて木剣での話だ。真剣になれば、また別である。そのうえ、槍、弓、馬上においての全ての動作で自分はラクレスの足下にも及ばない。何よりも自分に剣の振り方を教えてくれたのはラクレスである。

「呂大夫様」木剣を地に置き拝礼しながら答えたのはラクレスだった。「伯様の剣は常にそれより勝ります」

呂大夫はしばらくの間を置いて伯に言った。



「精進したようだな。」

伯はその言葉に微かな悲しみの響きがあるのを感じた。怒るにしても褒めるにしても豪快な人である。いつもとは違う父の物言いが気になった。

呂大夫はそれだけ言つと中庭から立ち去ろうときびすを返した。

「父上」

なぜか伯は無性に不安になり呼び止めた。振り向いた呂大夫は「一週間後、儂の部屋に來い」とだけ言つた。

## 第4話 序章

父の言うその日まで伯は季蝉を伴い、毎日丘にのぼり村を見た。稽古をし、時間があればまた季蝉を連れ村の人々と話して回った。伯が来ると村人は仕事の手を休め笑顔で世間話をする。みな伯と季蝉が好きであった。そして伯と季蝉もまたこの村全てを愛していた。皆家族だ。早く大人になってこの村を父のように守っていきたい。それが伯の夢であり生きる理由だった。

父は何か大事なことを自分に伝えようとしている、良いことなのか悪いことなのかは分からなかったがそれだけは間違いないと伯は思っている。

なぜか気が急いだ。今村を見ておかないと、もう見る事ができないような気がする。

父がかすかに見せた悲しみの感情は言葉にせずとも伯の心にしみ、臍を濡らした。

村を回る伯の足取りは日に日に早くなっていた。

6日目の朝、伯と季蝉はいつものように丘の上に登りはじめた。

「伯にいちゃん…なんかこのごろ元気ないよう」季蝉が言う。朝の清浄な空気が季蝉から香る芳香と合わさる。

「そう…見えるか？」その芳香に別世界に迷い込んだような錯覚を受けながら伯は応えた。

「うん…」季蝉は曖昧に頷き黙ってしまった。どうして？とは季蝉は聞かない。

おそらく季蝉は伯と呂大夫との間に何かあったことを感じているのだろう。

だから季蝉は問おうとしない、そこに伯は季蝉の聡明さと優しい心を見るのだった。

押し黙ったまま2人は丘を登りきった。

季蝉が伯の袖を引く。その動作に気づかされるまでもなく伯は丘上に先客の存在を認めていた。

## 第5話 序章

丘の上では伯がそうするように少年が村を見下ろしていた。

後ろから近づいてくる2人の足音を聞いても少年は振り返らない。伯と季蝉は何も言わず少年の横に並び村を眺めた。

いつもと変わらない平和な景色だった。まだ朝早いせいか村に見える人影はまばらである。

暫くの時が経った。だが少年はやはり面白くもなさそうに村を見ている。敏捷そうな体つきである。年は10を超えたばかりだろう。背は伯よりも頭一つ低い。

細くきつい目をした横顔は若々しい鷹を思わせる。髪は伯と同じように後ろで束ねていた。

「可比能よ」

伯は少年の名を呼んだ。

「伯にい」

やっと少年は口をひらくと伯の方を向いた。

かすれて大人びた声だ。心なしか声が沈んでいる。

「めずらしいな、お前が丘に登るのは」

「…伯にいに聞きたいことがあって待ってたんだ」少し答えに迷ってからそう言う可比較能はちらりと季蝉の方を見た。

その視線の意味に気づいた伯は、優しく季蝉の頭を撫でてやり「季蝉、少し散歩しておいで」と小さな声で言った。

季蝉は笑顔で頷くと、すぐに丘の反対に向かって歩きはじめた。

「賢いな…季蝉は」

可比能は季蝉の歩いて行くほうを見ながら言った。その言葉に伯は微笑で答えると少し真剣な顔で可比能を見た。

「ラクレスが旅支度か？」

伯は突然に問うた。

可比能は目を見開き驚きを表した。

「知ってたのか？」

「知らぬよ、そんな気がしただけだ」

伯は可比能から目をそらし村に目を向ける。村は眠りから覚めたように朝の生活を営みはじめていた。

## 第6話 序章

「親父がな：昨日の夜、旅支度をはじめたんだ」視線をそらした伯にかまわず可比能は語りはじめた。「驚いたよ、急だったからな。親父は良く旅には出るが必ず行き先も帰る日も前もって言うんだ。」

「それが昨日は違っていたのか？」伯の言葉に可比能が頷く。

「大違いさ。いくら聞いても大雑把なことしか言わねえ。まるで謎掛けだよ。」

強くなってきた風音に消されぬよう、かすれた声を強めて可比能は続けた。

今回の旅は長くなること、方角は北であるらしいこと、可比能も付いて行きたいと言ったが拒否されたこと、いつになくラクレスの表情が険しかったこと。

伯は目を閉じ、時々話に相づちをうつ。

可比能は乳飲み子の時にラクレスが養子としてもらい受けたと聞く。村の中で流れる噂ではこの中華の外にいる部族の生まれらしい。どういふ経緯でそうなったかは伯も知らない。ただ伯と可比能は幼少の頃から共に山を駆け、川で魚をとり、悪さをしてはラクレスに叱られた仲である。伯にはそれで十分だった。

だが、伯はそうであっても可比能がそうだとはい限らない。

「いつか俺を捨てた奴らを見返してやりたい」

そういう思いを可比能から感じる時がある。

もしかしたら明日父から伝えられる何かは可比能の出自にも関わるものなのかも知れない。だからラクレスは可比能の同行を拒んだのか。それとも命の危険がある旅だからなのか。あるいはその両方。可比能が語るにまかせ伯は思考の泉に沈んでいった。

「でな、伯にい、結局親父は肝心のどこへ行くかは教えてくれな

「かつたんだ」可比能は一気にしゃべり終わると最後にそう言った。可比能の話が終わると、伯はゆっくりと目を開けた。脳裏には一つの結論が導き出されていた。

「わかったぞ、可比能」

「何がだよ？」細い目を丸くして可比能は聞いた。

「お前の聞きたかったことさ」

伯は村から空に視線を移した。風に雨の匂いが混じりはじめた。

「行き先はな、恐らく檀石槐鮮卑だ」

「鮮卑…」可比能はその名前を聞いて顔色を変えた。北に見える黒い雲を見すえ、伯はまだ見ぬ草原の支配者達に想像をめぐらした。

## 第7話 序章

整然とした部屋だった。節くれた黒木の机が尺を用いて測られたように中央に鎮座している。掃除は隅々まで行き届いているが潔癖な印象は受けない。武骨さが形になったような部屋だった。

だが今日はその調和に挑戦するように大きな薙刀が戸口の壁に立て掛けられている。柄の部分は血痕が染み付き黒みを帯びていた。

部屋の主人はむっつりと座っているが怒っているわけではない。

緑色の目は向かいに胡座をかく男を映している。ラクレスが珍しく客人を相手にしているのだった。

「雨がきそうですね」ラクレスは言いながら久しぶりに会う友を見る。

古の物語に登場する鬼獣のような男である。ぶ厚い体をしている。胸板、腕、太腿、手のひら、そして首にいたるまで鎧のようにぶ厚い。伸ばすに任せた髪と髭、彫りの深い顔立ちは昼間でさえ眼焔に影を残している。歳は三十の半ば、男盛りである。熱い。男の体を造る細胞の一つ一つが沸騰しているのかもしれない。

同じ部屋にいただけでラクレスの額には汗がにじむ。

「雨ですか：どうでしょうな」曖昧に答えると男は目を閉じた。存外に優しい声である。男が一刻ほど前に尋ねてきてからの会話はほとんどこの調子である。

ラクレスは立て掛けてある薙刀をちらりと見た。刃先が象の鼻のように反り返って巻かれている。重さは恐らく200斤（約50kg）をくだるまい。切るのではなく叩き割るための武器だ。男はこの象鼻刀を小枝のように振り回しながら、もう一つの武器を自在に使う。それはすでに神技の域にあるとラクレスは思っている。

「長旅になるのですかな？」男が問う。



「恐らくは」ラクレスは簡潔に答えた。

短い言葉のやり取りの中ラクレスは男の剣気が微妙に揺らぐのを感じた。だがその揺らぎが何を意味するのかは分からない。

「見えませぬか。また弱くなりましたな：ラクレス殿」そう言う  
と男は残念そうに髭をさすった。

何が見えぬのか問おうとしてラクレスは止めた。ラクレスが老いたのではない、男がもはや届かぬ所まで昇ったのであろう。

「邪魔したようです。旅の武運を祈ります」男は目を開け腰をあげた。

戸口までラクレスが送ると、薙刀を手にとり振り返った男は思い出したように問うた。

「呂大夫の倅を鍛えているのか」突然の言葉にラクレスは真意を計りかねた。口調が変化している。魂を軋ませるような声である。

男の風貌と言葉がやつとかみ合ったようにも見える。

「今は近傍の丘に登っております」用心しながら答える。

「そやつは剛くなりそうか？」

ラクレスは間を置き、しかしはつきりと言った。

「：伯様は天才です。百年に1人の者となるでしょうな」

「儂の相手ができる程度にか」

男の目は鬼の目であった。

「残念ながら」とラクレスは首を横に振った。

人が鬼獣に勝てるのは物語の中だけだ。伯がこの鬼獣に勝てるとするならばその時すでに伯も人ではなからう。ラクレスは伯にそういう道を歩いてほしくはなかった。その時部屋で異様な音が響き机が真っ二つに割れた。

ラクレスは部屋での言葉に得心し、目の前の男に深々と別れの作法をとった。



## 第8話 序章

7日目の朝がきた。昨夜から降りだした雨は空が明るくなる頃には上がっていた。

伯は昼まで自室にこもり、丘で可比能から聞いたことを思索していた。昼食をとると1人で稽古をし、夕陽が沈むのを待って父の部屋へ向かった。

部屋の前に立つと伯は一度深く息を吸い、名を告げ戸を開けた。

部屋の中はすでに燭がともされ呂大夫とラクレスが胡座をかいて座っていた。ちらちらと揺れる燭の灯りが2人の顔に濃い陰影をつけている。

「座れ、布よ。長くなる」

呂大夫は右手に杯を持ちいつもと変わらぬ声でそう言った。伯は冷やりとしたものを背中に感じながら座についた。

呂大夫は今、伯の名を呼んだのだ。姓は呂、名は布。それが伯の本名である。

「伯」とは長男、お兄ちゃんという意味であり言わばあだ名ということになる。

中華では古来より人を名で呼ぶのは、目上の者以外では非常に失礼なこととされている。ゆえに父である呂大夫も含め皆は呂布を伯と呼んでいた。

つまり今日の話は家長として村長としての公的な話ということか。呂布はいずれまいを正して次の言葉を待った。

「可比能から旅の話聞いたそうだな」

呂大夫は酒瓶をラクレスに差し出ししながら聞いた。

「…はい」

小さな声でそう答えて呂布はラクレスを見た。やはり自分は旅に

出されるのだ。

ほとんど確信に近い予想であり、覚悟はできていたつもりであった。だからこそ呂布は自分の中からあふれてくる寂寥感に戸惑いを隠せなかった。

「愚息がつまらないことを申しました」

杯になみなみと注がれた酒を置くとラクレスは呂大夫に向かい頭を下げた。

呂大夫は軽く笑いながらそれを制し呂布に問う。

「さて勅の良いお前のことだ、儂がお前を何処へ送りだすか見当がついておろう」

「檀石槐鮮卑のところでしょうか」

少し身を乗り出した呂大夫をまっすぐに見ながら呂布は即答した。

檀石槐。一代で分裂していた鮮卑族を集束し、モンゴル平原をたிராげて檀石槐王朝を建てた男である。

永い間モンゴル平原を母地とし、漢帝国を震えあがらせてきた匈奴族でさえこの英雄の出現により南方へと押し込められている。この時代、鮮卑はアジアでも最強の騎馬民族であった。

「ふむ」

息子の慧知に満足そうに呂大夫は頷いた。そのままラクレスに向かって右手を差し伸べる。

ラクレスは懐中から取り出した真新しい巻紙を呂大夫に手渡した。

「これが何かわかるか」

紙を呂布に見えるよう床に広げながら呂大夫が言う。

「こ、これは…」

呂布はその紙を見て絶句した。紙の内容を表現する言葉が見つからない。

世に生きる人々の大半がはまだ持ち得ない概念をその紙は持っていた。

「それが、世界よ」

呂大夫は諭すようにそう言った。

## 第9話 序章

「世界…ですか」

呂布は紙から目をそらすことができない。

「人づてに聞いたものがほとんどですが、中には私が訪れた国もございます」

ラクレスが言う。

それはユーラシア大陸の殆どと北アフリカの一部が描かれた世界地図だった。呂布の住む漢帝国を右下に置きそこから出た道が中央にある砂利のような小国の群れを通り、地図の左側ほとんどを占める大国に続いている。他にも数多の国々や部族名が色を変えた筆で書かれている。

「世界とは…中華の外のことなのですか」

「そうではない…中華もまた世界の一部なのだ」

呂布の目は完全に少年に戻っていた。

ラクレスは呂布の顔を見て目を細めた。その瞳には安堵と優しがあった。

「この西の果てにある大国の名はなんと言うのですか」

「大秦国という。安敦という王が治めておるときく」

「この地図の外側はどうなっているのですか」

「まだ分からぬ。だが地図の外側にもまた違う国々があるのだらう」

呂布の疑問は尽きない。その一つ一つに呂大夫は答え続ける。

質問が一息つき、短い沈黙の後呂布はすねた子供のように言った。

「しかし、なんと…なんと我が国は小さいのだらう…」

漢帝国は周り全ての国の盟主であり、中華こそ世の中心である。当然のことではなかったのか。だが見よこの地図を。世界というもののの中では漢帝国ですら右下の一隅しか与えられぬのだ。

「その漢がな、さらに小さく割れようとしておる」

呂大夫の言葉に呂布は夢から覚めたように顔をあげた。

## 第10話 序章

「漢が…割れる…」

呂布はその言葉を反芻した。恐ろしい言葉だった。途中に多少のいざござはあったとしても漢帝国は四百年という永い間続いてきた国だ。

中華の民、少なくともこの村に住む者達にとっては漢帝国の存続は太陽が東から昇ることに等しい。四百年という時間は容易にそんな幻想を人々に抱かせる。

「それは漢ではなくなるということですか」

父は根拠もなく物事を言う人ではない。父がそう言うのであれば真実漢は割れようとしているのである。信じられぬ事ではあるが呂布の思考は冷静である。

漢は割れるという。ということは割れた後に建つ国があるということだ。それは百五十年前の光武帝の時、つまり現在でいう前漢と後漢の時のようにやはり漢という国に再びつながるものなのか、それとも全く違う国が建つということか。

呂布が聞きたいのはそこであった。

呂大夫はにやりと笑い「馬鹿者め」と言った後、杯を仰ぐようにして空にした。

顔を戻した呂大夫の顔からは笑みが消えている。

「よいか布よ、漢は割れる。一年後か五年後かそれは儂にもわからぬ。だが漢帝国を積み木の山とするなら、土台となる木はもはや朽ち果てておる。あと一押で山は崩れる。多くの血が流れるであろうな…。そしてその崩れた山を元に戻すか、新しい山を築くか…それは」

呂布の鼓動が早くなる。呂大夫はいったん言葉を切ると目を閉じ



て言った。

「お前達次第だ」

情味のある叱責を受けた呂布は素直に自分の言葉の過ちを認め、同時に腹下に火を放たれたような熱さを覚えた。

自分は将来父の後を継ぎ村を治め、守ってゆくものだと思っていた。いや、これからも勿論そのつもりだ。

だが、父は言った。世は乱れそれを変えていくのは自分達の仕事だと。

呂布は争いが好きではない、できる限り平和に暮らしたいと思っていた。しかし体の中から溢れだすものは全く別だった。

自分は心のどこかで乱世を望んでいたのか。

戸惑いを隠すように呂布は話の核心についてさらに問うた。

## 第11話 序章

「その漢の乱れに鮮卑の介入する余地があるということですね」

「この村は漢領の北端、匈奴との国境に位置してある。そして匈奴の北は全て鮮卑のものだ。もし漢の内乱に鮮卑が介入する気であれば、この村も戦火にさらされる。村の行く末を決める大事な内偵だ。布よ、お前にできるか」呂大夫は一気にそう伝えると呂布の答えを待った。

すでに呂布は冷静さを取り戻し呂大夫の目をまっすぐに見返している。

難しい内偵である。道程にある匈奴の領内も、今は漢に服属しているとはいえ安心ではあるまい。鮮卑領内に入れたとしても困難は続く。戦支度でもしていれば鮮卑が次に狙う地も容易にわからう。だが呂布が調べることは遠くない未来漢に何か異変が起こった時、鮮卑が軍事介入してくるかどうか、ということである。それはつまり、檀石槐自身に聞くしかなからう。並の者ならば達成は必死の任務である。だからこそ呂大夫はラクレスと呂布を選んだのだ。その期待に応えぬわけにはいくまい。

しかし、それとは別に呂布には気になることがあった。

そのわずかな逡巡の間に髪を入れず奥の間から怒鳴り声が聞こえた。

「伯にいにできねえことなんかねえよ！」

どん、と奥間の戸板が勢いよく開き二つの人影が現れた。

「隠れて聞いてりゃあ俺だけ除け者にしやがって！」先頭の人影がまくし立てる。

「隠れていたつもりかこの馬鹿者が！」  
いつにもまして不機嫌そうな顔でラクレスは叱責した。紙燭の明りでもはつきりとわかる。人影は可比能と季蝉だった。  
ラクレスが言うように呂布は部屋に入ったときから奥の間に息をひそめた珍客の存在を認めていた。ただ呂大夫とラクレスが気付いていないわけもなく放っておいたのだ。

呂大夫を見るとおかしそうに二人のやりとりを肴に酒を飲みはじめている。

可比能の表情は心底悔しがっているようだった。身振りも交えてラクレスに喰つてかかる。可比能の後ろに控えた季蝉の落ち着いた表情とは対象的である。

「やい、くそ親父！俺も連れていけ！」

「だめだ」

「なんでだよ！」

「死ぬからだ」

「死なねえよ！子供扱いしやがって！つれてけ！」

「だめだ」

「死んでもかまわねえ！」

「足手まといだ」

堂々巡りである。

「呂大夫様の前だぞ、わきまえんか！隠れて話を聞くことを暗に許されただけでも有り難く思え！」

「嫌だね！だいたい……」

その言葉が終わらぬうちにラクレスの拳が可比能の頬をとらえた。派手な音が室内に響き可比能は元いた奥の間まで文字通り飛んでいった。

「我が息子ながら痴れものというに他なりません……お許しを……」  
深々とラクレスは呂大夫に頭をさげた。奥の暗闇から弱々しい可

比能の声が聞こえる。言葉の最後は涙声に変わっていた。

「ちきしょう…なんで連れてってくれねえんだよ…俺が…鮮卑に捨てられた子供だからかよ」

## 第12話 序章

呂布は可比能から発せられた「鮮卑」という言葉がラクレスの怒気をすつと引かせていくのを感じた。

「知っておったのか…」

ラクレスが低く可比能に問い掛ける。

「ああ…」

涙を目に溜めたまま可比能は起き上がり、ラクレスの正面まできて座った。片頬は赤く腫れている。

場はしばらくの沈黙に包まれた。

「子の成長とは早いものだな、ラクレス。それとも…英血とはこういうものか」

沈黙は呂大夫によって破られた。

ラクレスは答えない。

「のう…ラクレス、行かせてやるわけにはいかんか」

呂布は大気の震えを通してはつきりとラクレスの動揺を感じた。

「しかし」

「死ぬのは心ということか」「…」ラクレスは黙っている。

「いつかは乗り越えなければならぬもの。息子がわいさゆえ逃げ切れるわけではないぞ」呂大夫は少し考え、言葉を繋げた。

「あと半年と言われた」

ラクレスの両目がいつぱいに開き、呂大夫を見つめた。

呂布には二人の会話の意味が分からない。可比能と季蝉も黙ってやりとりが終わるのを待っている。

「わかりました…呂大夫様…」ラクレスは半ば放心したようにそう答えた。

可比能はその瞬間、体を変え呂大夫に拝礼し言った。

「ありがとうございます呂大夫様。未熟者ではございますがこの大任の一助となるべく碎身の努力を惜しまないつもりです」

もういつものかすれて大人びた声に変わっている。だが目の輝きだけは嬉しさをかくせていない。

呂大夫はその言葉に頷くと大事な話があると言い、ラクレスと可比能に下がるよう促した。ラクレスは我に返ったように顔をあげ、残りたがる可比能をつまみあげて部屋から退出した。

あとには呂布と季蝉が残った。

### 第13話 序章

呂大夫はまた杯をあおり一息つくくと呂布を見据えた。

「さて布よお前に言わなければならぬことがある」

紙燭の明りが呂大夫を照らす。表情は険しい。

呂布は姿勢を正した。

「手短に言っぞ。一つ、鮮卑から帰ってもお前は村に入ってはならぬ。二つ、そのまま中華を知る旅に出よ。三つ、二年経ったら戻ってこい」

呂布は突然の言葉に声が出ない。横にいる季蝉が息を飲む。

「そして…季蝉よ、帰ってきたら布と結ばれてやってくれんか」

「父上！」たまらずに呂布は声をあげた。

「儂は季蝉に聞いておる」

ピシヤリと撥ね付けられた。

「どうか季蝉」念ずるように呂大夫はもう一度聞いた。

季蝉は驚いたが取り乱してはいなかった。腹の座った娘である。

「呂大夫様。わたくしの気持ちは問題ではございません。それよりも伯様の気持ちを知りとうございます」

やや頬が上気しているが冷静に季蝉は言った。いつもの伯に甘える口調ではない。

「父上…理由を…」

呂布の言葉を重ね消すように呂大夫は畳み掛ける。

「季蝉はこう申しておる。お前はどつなのだ」

違う、そうではない。呂布は二年の旅に出される理由を聞きたいのだ。

季蝉との婚儀は…それは嬉しくないといえは嘘になる。むしろ…いや違う。そうではない。次第に顔が熱くなっていくのがわかる。季蝉を横目で見る。橙色の中で凜とする季蝉の顔は人間とは思えない程に美しい。

いつの間にか鼓動まで早くなっている。つまり動揺しているのだ俺は。多少自嘲気味に自分を見つめて呂布は思った。

そして数瞬をおいて呂布の口から漏れた言葉は

「季蝉を妻に娶りとうございます」だった。

場の空気が弛緩していくのが肌で感じられた。

いささか強引な婚約だったが息子とその将来の妻を前にして呂大夫は満足げに頷いた。

そして表情を柔らげると呂布に言った。

「これで呂家も安泰だな。布よ、問うな。一人前と認めた男はすぐに旅にださせる。どんなことがあるうとな。これは代々の家訓なのだ。井の中の蛙は大海を知らねばならぬ」

「ですが父上、その句の後には『されど天の高さを知る』と続くとも言います」

いつもの呂布であれば呂大夫の言葉に違和感を感じたはずである。だがこの時の呂布は、動揺を隠そうと慣れない皮肉を言うことで精一杯だった。



「ふん。平和な時代はそれでも良からう。だがこれからの乱世で周りが見えぬ者など取って喰われるだけぞ」

そう一蹴すると呂大夫は立ち上がり背を向けた。

その背中が寢室に消えるまで見送り、呂布と季蝉は灯りを消し外に出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5940g/>

---

道（タオ）

2010年10月20日19時38分発行